第 21 章　礼拝と安息日

21. 1. 自然の光は、万物に対して主権と統治権を持っておられる神がおられるということ、神は善であり、すべての者に善を行われること。それゆえ、すべての者は神を敬い、愛し、賛美し、神に祈るべきあり、神を信頼し、心と霊魂と力を尽くして、神をあがめることが当然であることを見せているのです（ロマ 1:20、使徒 17:24、詩 119:68、エレミヤ 10:7、詩 31:23、詩 18:3、ロマ 10:12、詩 62:8、ヨシュア 24:14、マルコ 12:33）。しかし、この真の神を礼拝するに正しい方法は、神ご自身によって制定され、ご自身が啓示した御心によって制限されているので、人々の想像や考案された物とか、またサタンの提案による、何か可視的な表現の下で、あるいは、聖書において命令されていない、何か他の方法で、神を礼拝してはなりません（申 12:32、マタイ 15:9、使徒 17:25、マタイ 4:9, 10、申 4:15－20、出 20:4－6、コロサイ 2:23）。

すべての人々は神がおられることと、主権者であることを知っていて、神を必ず礼拝すべきであることを知っています。しかし神を礼拝する方法は、神ご自身によって制定されて、啓示されました。従って必ず、神が定められた方式通り礼拝すべきです。人々の想像や考案した方法で捧げてはならず、サタンによって提案された方式に従うタイプの表現なども用してはなりません。ただ聖

書に規定された方式に従うべきであり、規定されていない方式では、捧げてはなりません。

ところが、ローマカトリックの形象礼拝は、十戒の第二の戒めを犯すことで、偶像的で、悪魔的です。また、ローマカトリック教会の儀式を真似しているルター教会（Lutheran）と英国国教会の儀式も偶像的です。さらに現代福音主義教会の中に人間に焦点を合わせた開かれた礼拝（seeker’s sensitive worship service）[99] それと類似する礼拝等も聖書的礼拝ではありません。

21. 2. 信仰的礼拝とは、父・子・聖霊なる神、この神のみに捧げるべきである（マタイ 4:10、ヨハネ 5:23、Ⅱコリント 13:13）、天使や聖人、また他の何か被造物に捧げてはなりません（コロサイ 2:18、黙 19:10、ロマ 1:25）。堕落以降、仲保者なしに礼拝が捧げられることはできず、キリスト以外に、どのような他の仲保者を通して奉げられることはできません（ヨハネ 14:6、Ⅰテモテ 2:5、エペソ 2:18、コロサイ 3:17）。

礼拝は、父と子と聖霊に等々に捧げられるべきです。礼拝の時、使徒信条を奉読する時は、礼拝の対象である三位の神がなさった働きを考えながら、賛美と感謝をするためです。更に礼拝ごとに使徒の祝福（礼拝の最後の部分で祝祷）を私たちが聞いていることを記憶することです（Ⅱコリント 13:13）。しかし教皇主義者たちは、マリアと聖人たちに礼拝しなさいと言います。

---

99 直訳するなら、求道者に敏感な礼拝ですが、言葉の通り、人間の反応に焦点を合わせた構成された礼拝です。

21.3. 信仰的な礼拝の特別な部分として、感謝をもって奉げる祈りは（ピリピ 4:6）神がすべての人に求められることで（詩 65:2）この祈りが受け入れられるために、御子の名によって（ヨハネ 14:13-14、Ｉペテロ 2:5）その御霊の助けによって（ロマ 8:26）その御心に従う願い（Ｉヨハネ 5:14）をすべきです。祈りは、理解・尊敬・謙遜・熱心・信仰・愛・忍耐をもってなすべきです（詩 47:7、伝道書 5:1, 2、ヘブル 12:28、創 18:27、ヤコブ 5:16、ヤコブ 1:6-7、マルコ 11:24、マタイ 6:12, 14-15、コロサイ 4:2、エペソ 6:18）。そして、もし声を出して祈るなら、よく知られた言葉でなすべきです（Ｉコリント 14:14）。

祈りは、礼拝の重要な部分です。新生していない者が祈ることができるのかに対する質問に、ウェストミンスター信仰告白書は、しても良い、またすべきであると語っています。祈りはキリストの御名によってすべきであり、必ず聖霊さまの助けを受けることです。清教徒たちは、聖霊の助けの祈りを強調しますが、必ず、祈るべき内容を聖霊さまが照明してくださると付け加えました。祈りの態度として尊敬、謙遜、熱心、信仰、愛、忍耐がなければならないと述べました。また知らされている言語で祈りなさいというのは、ローマ教会のラテン語だけで祈ることが間違っていることを意味します。

21.4. 祈りは、合法的な事柄のため（Ｉヨハネ 5:14）今生きているすべての種類の人々と、また将来、生きて行く人々のために捧げられるべきで（Ｉテモテ 2:1-2、ヨハネ 17:20、Ⅱサムエル 7:29、ルツ 4:12）死んだ者たちのためにとか（Ⅱサムエル 12:21-23、ルカ 16:25-26、黙 14:13）、死に至る罪を犯した者たちと知られている人々のために、祈ってはなりません（Ｉヨハネ 5:16）。

合法的な祈りというのは、神の御心に叶う内容の祈りを意味します。4 項において誤りを指摘しているのは、ローマ教会の死んだ者のために祈ることです。一方、死に至る罪を犯した者のために祈らないようにとは、使徒ヨハネの言葉から根拠にしています。

21.5. 敬虔な恐れを持って聖書を読むこと（使徒 15:21、黙 1:3）正しい説教を行うこと（Ⅱテモテ 4:2）。神に従順する心・理解・信仰・尊敬心を持って誠実に説教を聞くこと（ヤコブ 1:22、使徒 10:33、マタイ 13:19、ヘブル 4:2、イザヤ 66:2）、恵み充満な心で詩篇を歌うこと（コロサイ 3:16、エペソ 5:19、ヤコブ 5:13）、キリストが制定された聖礼典を正しく施行し、相応しく受けること、これらすべては、神に捧げる通常の礼拝の部分です（マタイ 28:19、Ⅰコリント 11:23-29、使徒 2:42）。この他に特別な場合と（詩 107:1-43、エステル 9:22）適切な時に[100]、礼拝の他の要素などがありますが、信仰的誓い（申 6:13、ネヘミヤ 10:29）や誓願（イザヤ 19:21、伝道書 5:4,5）、厳粛な断食と（ヨエル 2:12、エステル 4:16、マタイ 9:15、Ⅰコリント 7:5）感謝があります。これらは聖く、敬虔な方式で使用されるべきです（ヘブル 12:28）

---

100 この部分で、本来の初版には「upon special occasions, which are in their several times and season」となっています。現代版では「on special occasions and at appropriate times」と翻訳されました。初版でこのように叙述した理由は、清教徒たちが特別な場合は、時に応じて断食日と感謝日を持っていて、ウェストミンスター総会員たちが信仰告白を作成した時にも、議会が断食日と感謝日を守りました。それは、旧約の祭りを守ることではありません。当時国家と教会の状況に応じてこのように断食日と感謝日を設けたのです。従って、現代版で、特別な場合と適切な時だと翻訳して、祭りを守ることとしての誤解を避けました。

聖書を読むこと、説教を行うこと、詩篇を歌うこと、聖礼典を施行し受けることが礼拝の通常の部分になります。清教徒は、礼拝の中でほとんど常に詩篇を歌いました。また詩篇以外、他の聖書箇所を歌ったりもしました。さらに清教徒は四旬節、聖誕節等を反対しました。5 項での、礼拝の特別な要素として誓願、断食、感謝を言及しますが、清教徒は、特別な場合に（例を上げると、ウェストミンスター総会が標準文書を作っている時）断食の日と感謝の日と定めて礼拝しました。

21.6. 福音の下では祈りも、信仰的礼拝として、他のどの要素も、それが行われる、あるいは、それが向けられるどんな場所にも縛られず、その場所だからと、一層受け入れられることはありません（ヨハネ 4:21）。それとは反対に、神はすべてのところで（マラキ 1:11、Ⅰテモテ 2:8）霊と真をもって（ヨハネ 4:23-24）神に礼拝すべきです。神は個人の家庭で（エレミヤ 10:25、申 6:6-7、ヨブ 1:5、Ⅱサムエル 6:18,20、Ⅰペテロ 3:7、使徒 10:2）日ごとに（マタイ 6:11）、各個人によって密かに礼拝すべきであり（マタイ 6:6、エペソ 6:18）また公的集会では、より一層厳粛に礼拝すべきです。神の御言葉、またその摂理によって、神さまが彼らを礼拝に招くとき、礼拝を不注意から奉げたり、また意図的に無視したり、放棄したりしてはなりません。（イザヤ 56:6-7、ヘブル 10:25、箴言 1:20-21,24、箴言 8:34、使徒 13:42、ルカ 4:16、使徒 2:42）。

福音の下では、礼拝のために特別な場所は廃止されました。そして 6 項では、公的礼拝と個人礼拝とを区分して説明しました。清教徒は、家庭礼拝と個人が私的に捧げる礼拝を重要視しますが、それを家庭祭壇（family alrar）と呼ばれたりもします。それは家庭での、信仰教育に焦点を置いていて、家庭ではだれでも、自分の信仰を形式的に隠すことができない所と見たからです。特にウェストミンスター小教理問答書は家庭での、子供教育のための目的で作成されま

した。一方、公的礼拝は厳粛に順守されるべきだと強調しました。

21.7. 一般的に、正当な割合の時間を神礼拝のために聖別するということが自然法則であるように、神はご自身の御言葉において、すべての時代にすべての人を贖うために積極的・道徳的・永続的な命令として、七日のうち一日を安息日として、ご自身に聖く捧げることを特に定めました（出 20:8,10-11、イザヤ 56:2,4,6-7）。それは世の初めからキリストの復活までは、指定された安息日は、週の最後の日でした。キリストの復活と共に安息日は、週の初めの日と変更されました（創 2:2-3、Ｉコリント 16:1-2、使徒 20:7）。聖書には、この日を主日と呼び（黙 1:10）、キリスト者の安息日として（出 20:8,10、マタイ 5:17-18）世の最後の時まで継続されます。

清教徒は、カルヴァンと違って安息日を道徳律法として見なしたのですが、その根拠として安息日の規定が、創造時の戒めだからと言います。安息日の規定が、道徳律法として清教徒は、安息日の永続性を語りながら、安息日が主日に変更されたことを持って、キリスト者の安息日（Christian Sabbath）という用語を使用しました、清教徒は、安息日が安息と贖いを示すことだと強調しました。さらに清教徒は、ローマカトリックと英国国教会の聖なる祭りと曜日などを反対しました。それゆえ、ウェストミンスター信仰告白書は、ただ主日だけが聖なる日と認めました。

21.8. この安息日は、主に対して聖く守るべきであり、人々が自分の心を相応しく準備し、彼らの日常的な用務を先々整頓したのち、丸一日を毎日の職業や娯楽に関連する事や言葉・そして思いから離れて、聖なる安息をするだけでなく（出 20:8、出 16:23, 25, 26, 29, 30、出 31:15-17、イザヤ 58:13、ネヘミヤ 13:15-19, 21, 22）全体時間を、公的に個人的に礼拝を奉げることと、やむおえない義務と憐れみを施すべき義務とに使用します（イザヤ 58:13、マタイ 12:1-13）。

8 項では、安息日を聖く守る方法について説明していますが、世俗的なことと娯楽のことを止めて、礼拝に奉げられることとして語っています。そのように叙述した理由は、その当時、英国国教会が主日にスポーツを進める文書を作って、礼拝時に読むようにしていたからです。それで清教徒は、スポーツ文書を反対して、主日を聖く守る運動を展開させました。